

大阪市東住吉区

今林遺跡発掘調査報告

大阪市東部市場における建設工事にかかる発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大阪市東住吉区

今林遺跡発掘調査報告

大阪市東部市場における建設工事にかかる発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

序 文

今林遺跡は河内平野を流れる平野川が形成した自然堤防上に存在する。本書で報告する発掘調査によってはじめて発見された遺跡であるが、その存在は予想されるものでもあった。2009年の発掘調査によって大きな成果を上げ、すでに成果が公表されている平野馬場遺跡の例からもわかるとおり、一帯の分厚い沖積層の下には未発見の遺跡がまだまだ眠っていることと思われる。

本書では、中世以降に耕作地として利用される以前、今林遺跡に古墳時代初頭の集落が存在していた可能性に言及した。その実態を解き明かすのは、地下深くを探求する発掘調査の積み重ね以外にない。本書がそのための一助となれば幸いである。

最後に、本遺跡の発掘調査から報告書刊行に至るまで多大なるご協力を賜った大阪市をはじめとする関係各位に厚く御礼を申し上げる。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長 長山 雅一

例　　言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会(現 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)が、大阪市東住吉区今林一丁目2において2008年度に実施した今林遺跡発掘調査(IM08-1次)の報告書である。
- 一、発掘調査および報告書作成に係る費用は大阪市中央卸売市場が負担した。
- 一、発掘調査は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長兼調査課長 南 秀雄の指揮のもと、同事業企画課長代理 清水和明が行った。本書の編集は南の指導のもと、清水が主として行い、同研究所学芸員 小田木富慈美がこれを補佐した。執筆は遺物以外の記載を清水が、遺物についての記載を小田木が行った。調査の面積・期間などは第I章に示した。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、難波宮調査事務所長 高橋 工・東淀川調査事務所長 佐藤 隆・学芸員 小倉 徹也による校正委員が行った。
- 一、遺構写真は清水が撮影した。
- 一、基準点測量および水準点測量はアジア航測株式会社による。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪文化財研究所が保管している。

凡　　例

1. 本書で用いた層序学・堆積学的用語の中で、遺跡に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 出土遺物には1からの通し番号を付している。
3. 水準値はTP値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、座標値は測地成果2000に基づく。図中の方位は図1・2が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
4. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
5. 引用・参考文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者　発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。また、本文中で引用文献を表記する際、大阪文化財研究所→大文研、大阪市文化財協会→大文協、大阪市教育委員会→大市教と省略した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査の経緯・経過	1
1) 遺跡の立地と周辺地域の歴史	1
2) 発掘調査に至る経緯と調査経過	2
3) 報告書作成の経過	3
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 層序	5
第2節 遺構と遺物	9
1) 西区	9
i) 古代の地層	
ii) 中近世の遺構と遺物	
2) 東区	10
i) 古墳時代の地層と遺物	
ii) 古代の地層と遺物	
iii) 中近世の遺構と遺物	
第3節 平野馬場遺跡との地層の対比	11
第Ⅲ章 まとめ	13
引用・参考文献	14

英文目次

報告書抄録

図 版 目 次

1	西区調査終了時・遺構検出状況	2	東区調査終了時・地層断面
	上：調査終了時(北西から)		上：調査終了時(東から)
	中：第4層上面(西から)		中：調査区北・東壁地層断面(南西から)
	下：SP301検出状況(北西から)		下：調査区深掘り部南壁地層断面(北から)

挿 図 目 次

図1	今林遺跡の位置	1	図7	調査地東壁地層断面図	6
図2	大阪平野とその周辺の地形分類図	2	図8	調査地西壁地層断面図	7
図3	周辺の遺跡	3	図9	遺構平面図	9
図4	調査位置図	3	図10	遺構断面図	9
図5	調査区配置図	4	図11	第8層出土遺物実測図	10
図6	調査地南壁地層断面図	6・7	図12	地層の対比	11

写 真 目 次

写真1 第8層出土壺1 10

第Ⅰ章 遺跡の立地と調査の経緯・経過

1) 遺跡の立地と周辺地域の歴史

今林遺跡は大阪市の東南部、東住吉区今林1丁目に所在し、上町台地の東側斜面から河内平野に降った地点に当る(図1)。

一帯は平野川が大阪平野を北西方向へ流れて形成した自然堤防の左岸側が氾濫原に移行する付近に位置する(図2)。現在でも国道25号線から北側には、その方位に平行した町割が残っている。平野川は遺跡の西側付近で上町台地の東側緩斜面を形成する段丘構成層にぶつかり、北流する旧西除川(現今川)がと合流してそのまま上町台地の東側緩斜面を北流している。今林遺跡はその合流地点にほど近い場所に位置している。

今林遺跡は従来知られていなかった遺跡で、2008年度に行われた大阪市教育委員会による試掘調査の結果、埋蔵文化財の包蔵地であることが確認され、本格的な発掘調査が行われたものである。

今林遺跡から半径1kmの範囲に存在する遺跡には林寺遺跡・杭全遺跡・桑津遺跡、平野馬場遺跡が知られる(図3)。林寺遺跡は本遺跡の北西500m付近にあって飛鳥・奈良時代の建物群、溝などが見つかっている[大市教・大文協2002]。また、南西500mには杭全遺跡があり、弥生時代前期末の集落が見つかっている[大市教・大文協1996]。そしてその西には著名な桑津遺跡が位置している。桑津遺跡は弥生時代～古代の拠点的な集落が検出されている複合遺跡として古くから知られており、また調査件数も多い。ナイフ形石器などの旧石器時代、有茎尖頭器・石鏃など縄文時代時代の遺物に加え、弥生時代には中期後葉をピークとする集落が営まれ、後期に入って一時断絶するが終末期の大溝が確認されていることから再び活性化するようである[大文協1998、大市教・大文協2006]。桑津遺跡では古墳時代中期、後期後葉以降～奈良時代にも非常に多くの遺構・遺物が確認されており、特に飛鳥時代後半に入って遺跡西南部に田辺廃寺が建立されるなど、古代有力氏族との関係も検討が必要とされている。

さらに近年の成果として平野馬場遺跡での発見が特筆される。平野馬場遺跡は2009年における中近世の調査を嚆矢とし[大文協2009]、その後、2010年に百濟駅改修工事に伴う発掘調査で近世の島畠溝や井戸を検出したほか、弥生時代終末～古墳時代初頭の掘立柱建物・竪穴建物などの建物群や土壙・溝などの遺構を発見し、3時期にわたる集落の盛衰を明らかにした。この発見は、河内平野西南部に

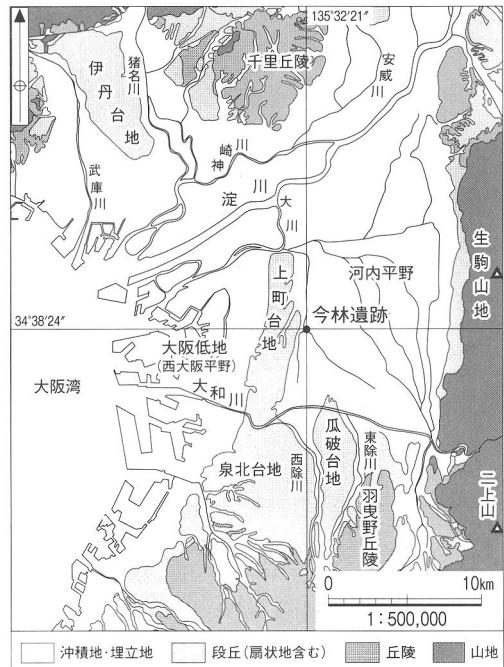


図1 今林遺跡の位置

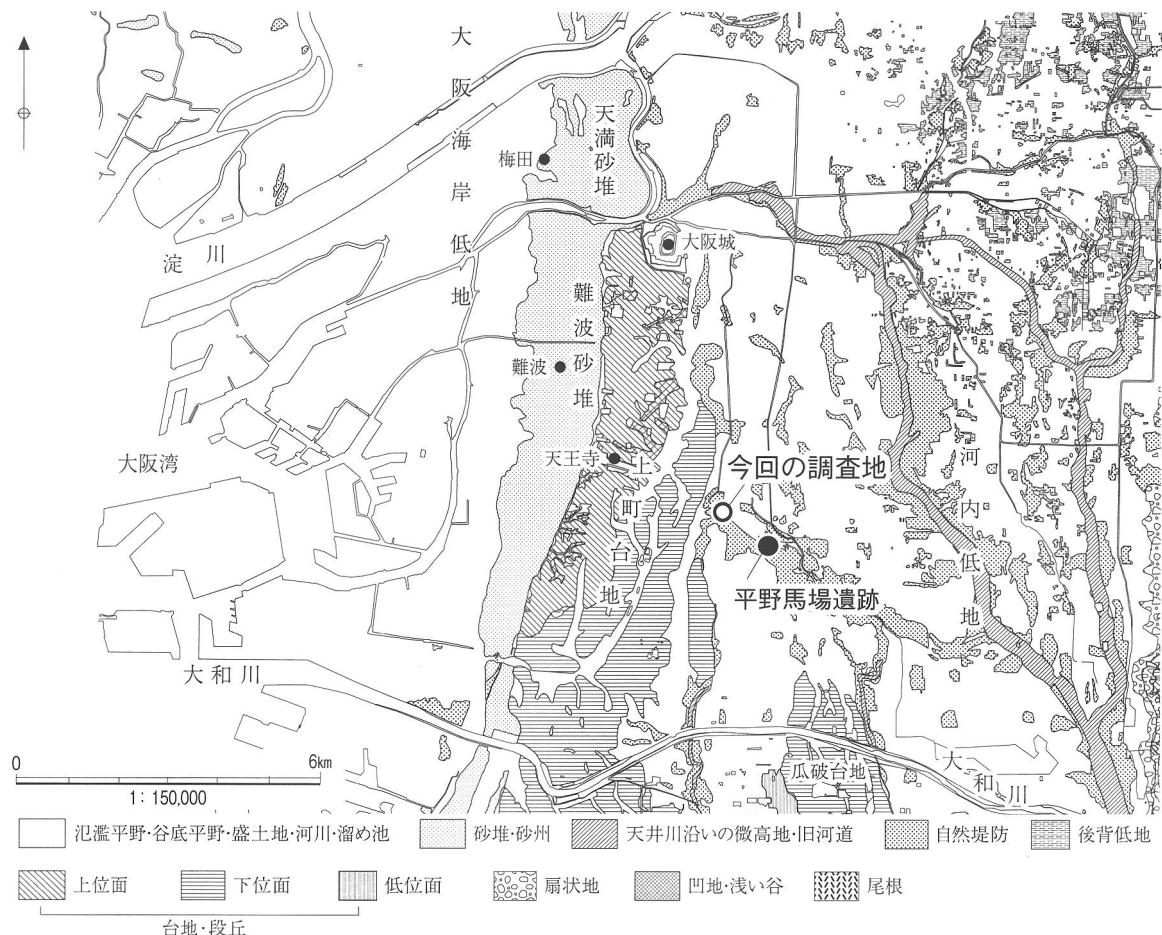


図2 大阪平野とその周辺の地形分類図(土地条件図[建設省国土地理院1983]をもとに作成)

おいて、当該期の空白地帯であった地域に新たな集落が確認された点で大きな意義を持つものであり、同じく平野川左岸の自然堤防上に立地することから、今林遺跡の性格を考える上でも重要である。

2) 発掘調査に至る経緯と調査経過

今回の調査地点は大阪市中央卸売市場東部市場構内の西南隅にあり(図4)、前述のとおり周辺遺跡の存在から、当該地においても埋蔵文化財の存在が予想され、本件の建設工事に先立って大阪市教育委員会の試掘調査が行われた。その結果、現代の整地層以下に近世や中世に遡ると思われる地層が良好に堆積していることが確認された。そこで、一帯における中世以前の実態を明らかにすることをおもな目的として調査を実施した。

場内に残土を仮置きするため東西2区に分けて反転調査を行うこととし(図5)、平成20年12月22日に西区から開始した。南北5m×東西22mの範囲を後述する第3B層すなわち中世とみられる作土層直上まで重機で掘削し、1月5日以降は第3B層の上面および下面で精査を行い、検出された遺構を図面・写真によって記録した。さらに第4層以下は湧水が激しくなるため西区の東西で部分的に掘削することとし、TP+0.0mまでの地層を断面で記録した。西区の埋戻しは平成21年1月9日・10日に完了し、続けて南北5m×東西10mの東区を重機により第3B層まで掘削し、同日完了した。西区と同様に第3B層の上面と下面で精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。その後、14日からは下位の地層を

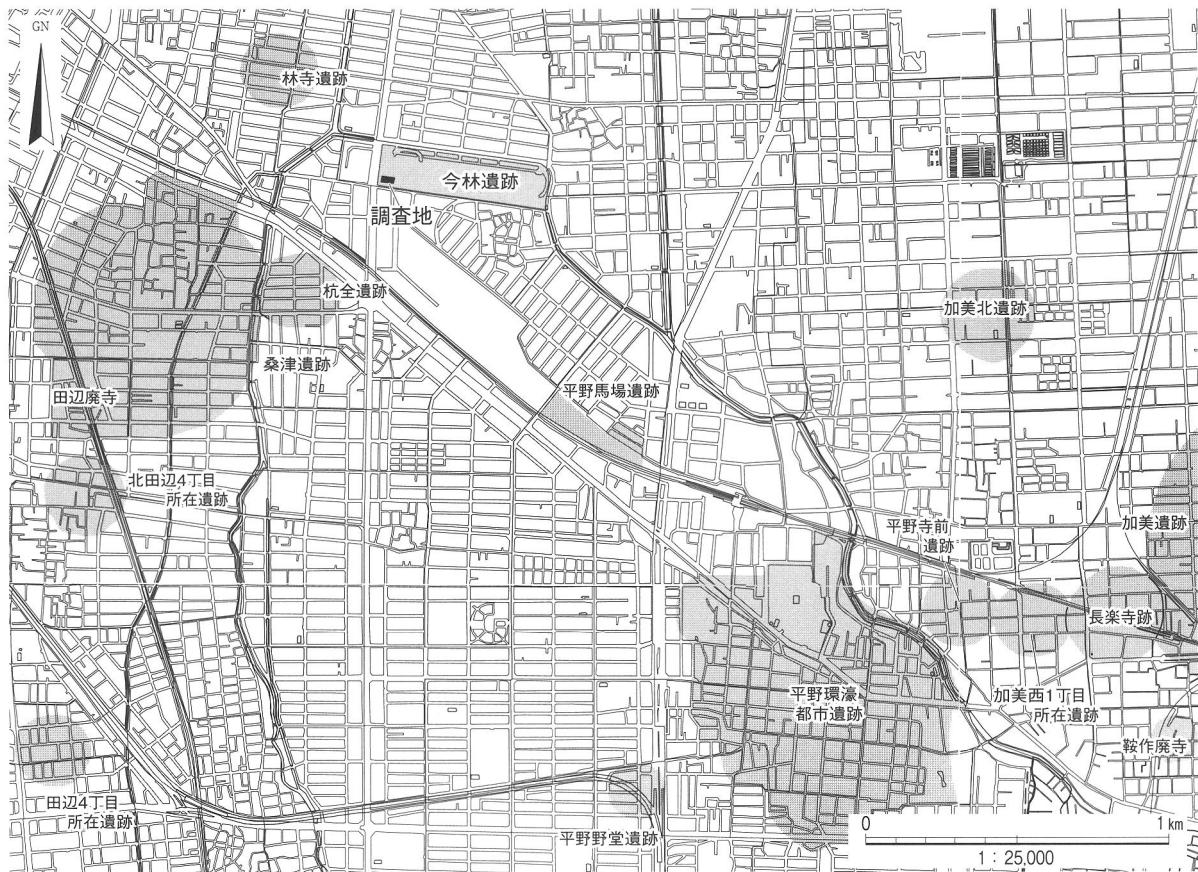


図3 周辺の遺跡

確認するため重機および人力で深掘りを行い、TP + 0.4m付近で泥炭質シルト層の第8層を確認した。その上位から湧水が非常に激しく、平面的な調査を行うことはできなかったが、地層の観察と地層内から数点の土器片と植物遺体を採取した。1月16日に基準点測量を行った後に東区を埋め戻し、同日に器材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

3) 報告書作成の経過

調査終了後は、出土した遺物および現地で作成した図面・写真を大阪文化財研究所難波宮調査事務所に搬入し、整理作業を行った。遺物については洗浄・注記・接合作業の後、必要な遺物の実測および写真撮影を行った。

報告書の編集は、調査時の平面・断面図および遺物実測図をパソコン用データによってデジタルトレースし、調査時の写真および遺物写真のスキャニングデータと合わせてページレイアウトソフトによって割付けしたデータをもとに、印刷・製本作業を外部委

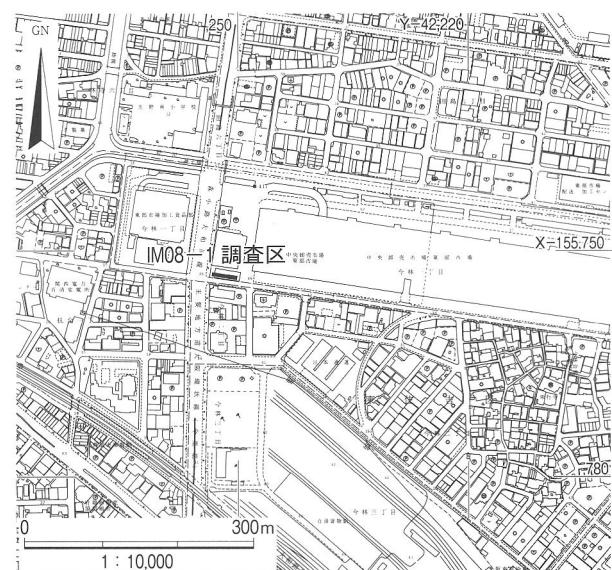


図4 調査地位置図

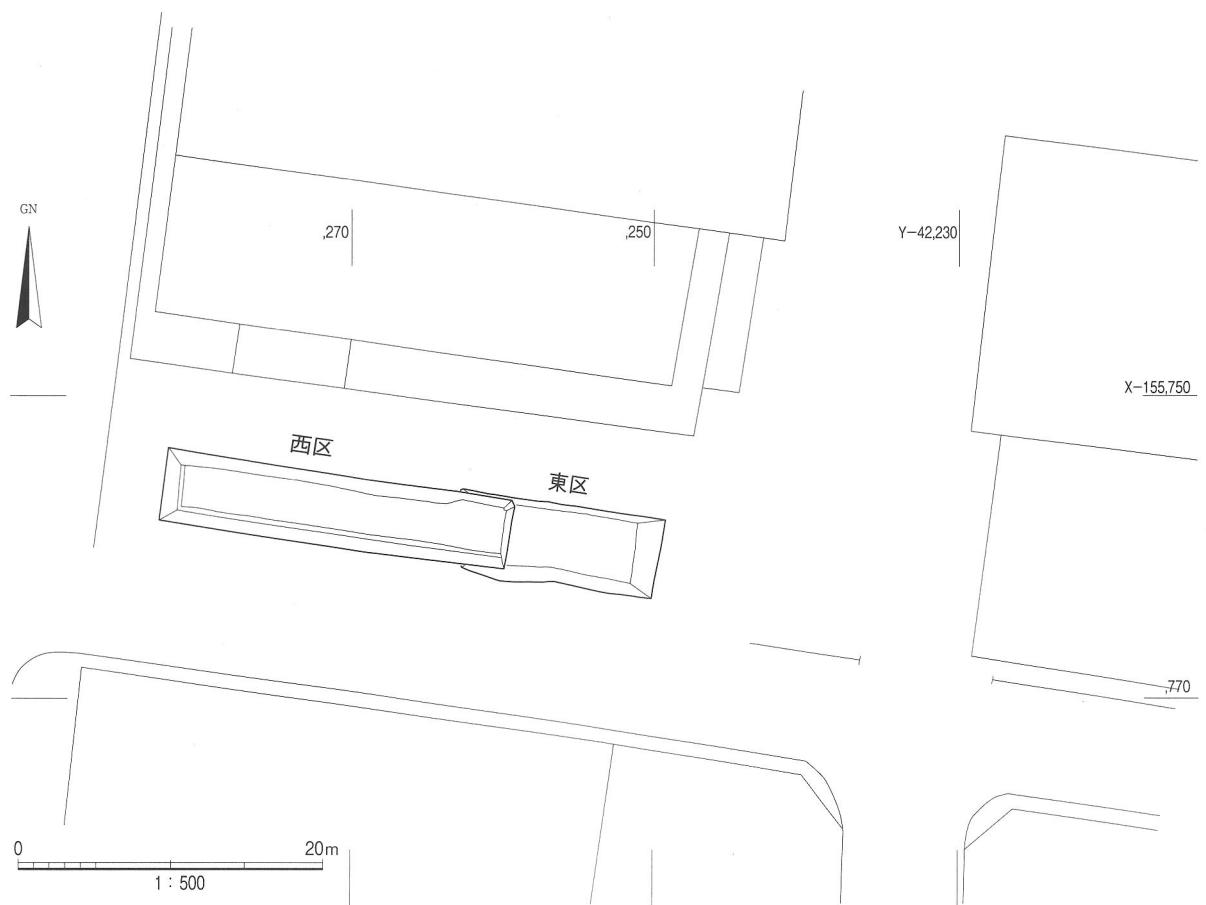


図 5 調査区配置図

託して報告書を完成させた。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

第0層：暗褐色(10YR3/3)砂・礫層で、現代のコンクリート片・鉄筋などを含む。東部市場の建設当時に整地された地層で、層厚はおよそ100cmである。

第1層は岩相から1A層・1B層の2層に大別される近現代の作土層である。

第1A層：オリーブ黒色(5Y2/2)礫混りシルト質中粒砂層で、層厚5cm程度の作土である。

第1B層：炭化物を含む暗褐色(10YR3/3)礫質中粒砂層で、層厚10cm程度の作土である。

第2層は、2A層・2B層・2C層の3層に大別される近世の作土層である。

第2A層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト層で層厚5cmである。

第2B層：オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂～細礫混りシルト質粘土層で層厚10cmである。

第2C層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫混りシルト質粘土層で層厚15cmである

第3層は3A層・3B層・3C層の3層に大別される中近世の作土層である。出土遺物がなく正確な時期は不明である。3A層までは重機により掘削している。3A層・3B層は酸化マンガン斑文が顕著であり、水田に利用されたものであろう。3C層の上面で小穴などの遺構を検出した。

第3A層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層で、酸化マンガン斑文が顕著である。層厚15cmである。

第3B層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルト層で、酸化マンガン斑文が顕著である。層厚10cmである。

第3C層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂混り粘土質シルト層で、上位の水田作土の床土とみられる。層厚10～15cmである。

第4層～第7層は河川堆積層ないし湿地性堆積層である。層理面に明瞭な離水痕跡がみられず、概ね連続的に堆積したものとみてよいであろう。

第4層は4A層・4B層の2層に大別される。

第4A層：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルトからなる水漬きの地層で、河川堆積層の最上位に堆積したものである。層厚は10cmである。

第4B層：灰色(10Y6/1)中粒～極粗粒砂層で、トラフ型斜交ラミナが顕著な河川堆積層である。流れの向きは調査区の南西から北東へ進んでいる。上方へ細粒化している。層厚は30cmである。西区で本層内から摩耗の著しい土師器細片が1点出土している。

第5層：灰色(7.5Y4/1)極細粒砂質シルト層である。断面観察によって、本層上面および層中の複数の葉理面から踏込みが多数確認される。層厚は40cmである。

第6層：暗灰色(7.5Y3/1)シルト層である。ラミナは確認でき、水漬きの湿地性の堆積物である。

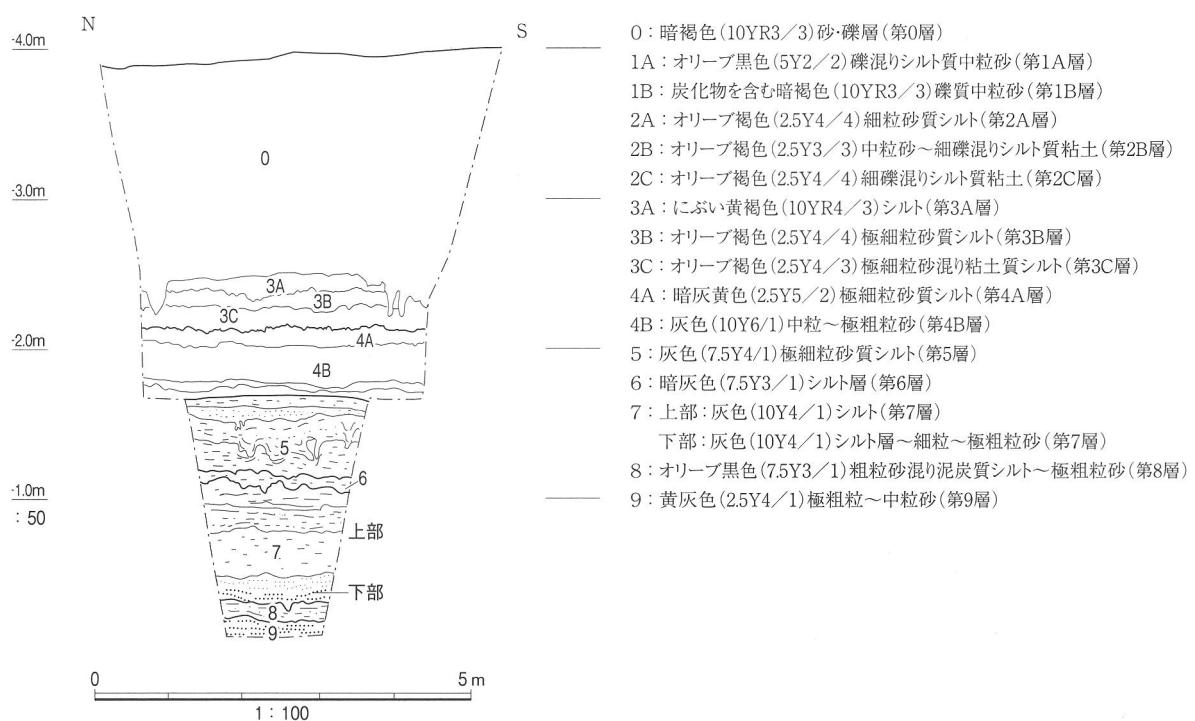
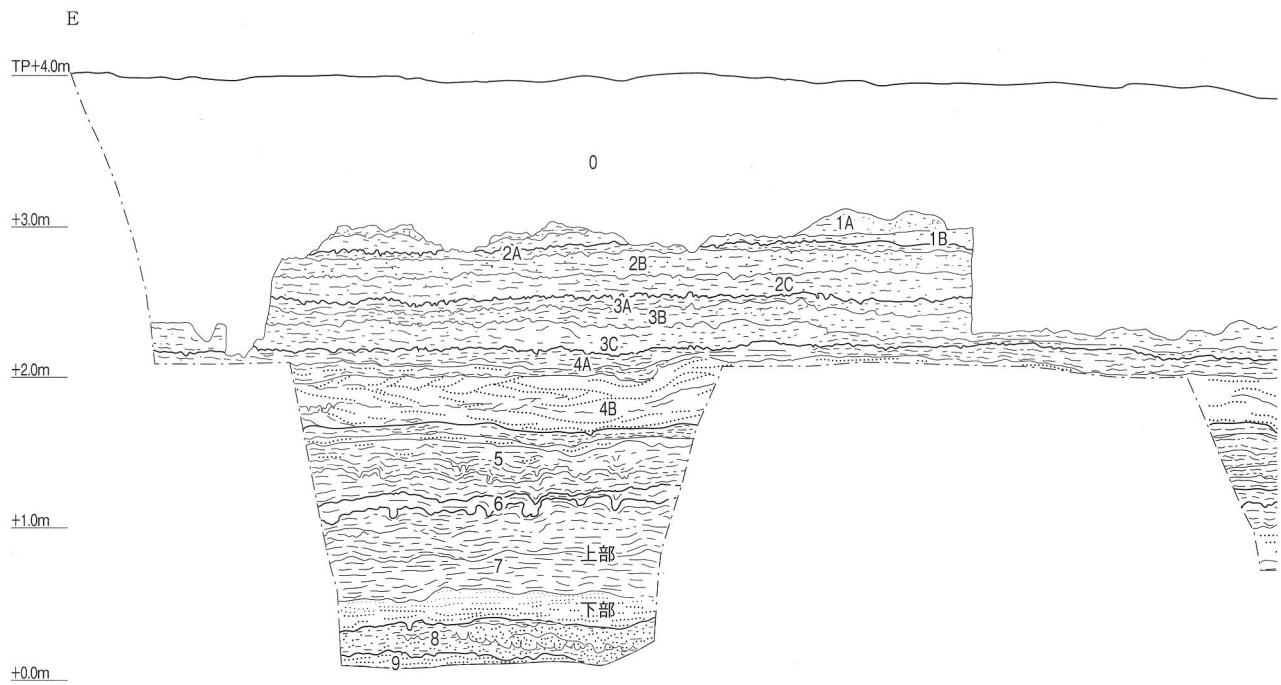


図7 調査地東壁地層断面図



図 6 調査地南壁地層断面図

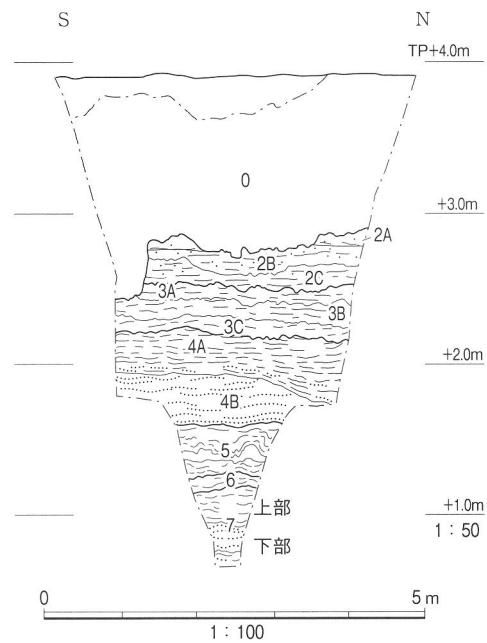


図 8 調査地西壁地層断面図

第Ⅱ章 調査の結果

暗色化しているが、土壤形成は進んでいない。層厚は10cmである。

第7層：灰色(10Y4/1)上部はシルト層を主体とし、炭化物ラミナが連続して確認できる。下部は細粒～極粗粒砂層の水成層である。層厚は80～90cmである。

第8層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂混り泥炭質シルト層～極粗粒砂層で、東区でのみ確認できた。東壁付近では泥炭質が強い。西部は粗粒砂偽礫や第9層由来の灰白色中粒砂偽礫が含まれる。古式土師器細片が出土し、古墳時代前半の遺物包含層と考えられる。層厚は東端で15cm、西に向かって薄くなり10cm以下となる。

第9層：黄灰色(2.5Y4/1)極粗粒～中粒砂層の水成層で、調査区の基底で確認したが、湧水が激しく詳細は確認できなかった。

第2節 遺構と遺物

1) 西区

i) 古代の地層

第4～7層はほとんど出土遺物がないため、本調査地で時期を決定することはできないが、第8層で古墳時代前期の遺物が出土しているため、おおよそ古墳時代後半～古代ないし中世ころの地層と考えることができる。

第4B層の砂層からは南西から北東方向の古流向を認めるが、平野川の方向とは一致していない。第1章に述べたとおり、本調査地点は旧西除川の河道にも近く、その活動の大きさによって当地まで堆積物が運ばれてきたことを示している可能性が考えられよう。

また、河川堆積層ないし湿地堆積層のため、人間活動のほとんど及ばない場所であったと考えられる。地層断面の観察からは第5層上面から層内の複数の葉理面で踏込みが見られるが、幅5

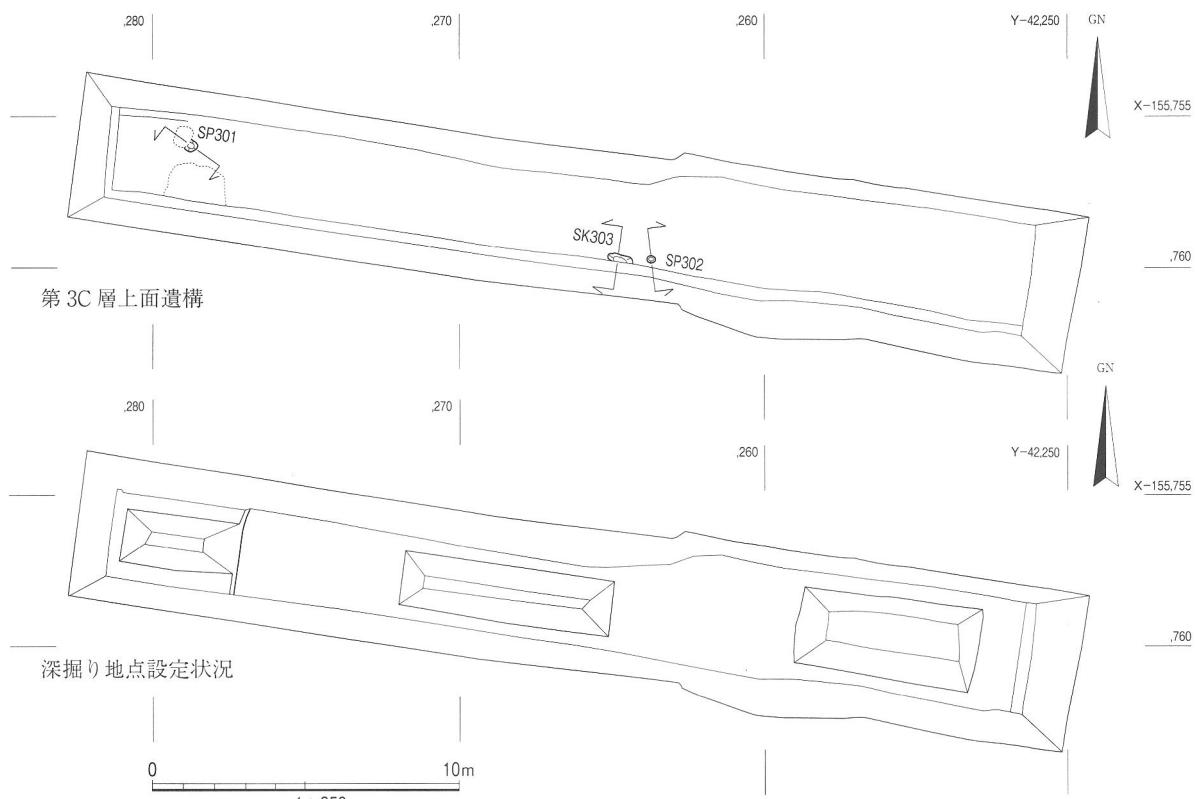


図9 遺構平面図

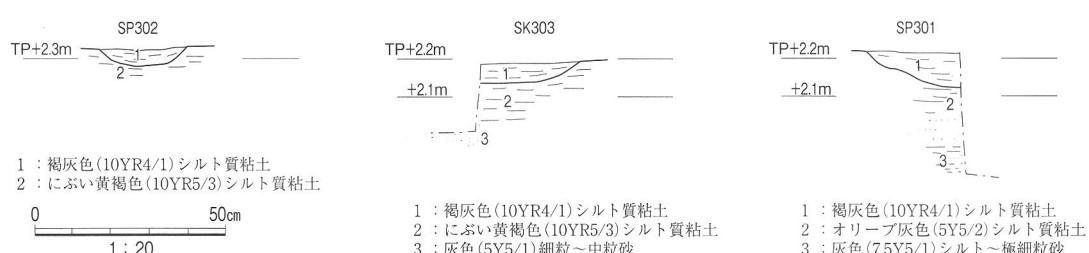


図10 遺構断面図

cm程度の狭いものが多く、人間によって着けられたものであるかは疑問である。第6層にも踏込みによる変形が認められるが、人間活動を示す積極的な証拠はない。第7層はおおむね水平に堆積しており、明瞭な踏込み等を確認することはできなかった。

ii) 中近世の遺構と遺物

第3層は作土層である。耕作に関係することが明確な遺構は検出できなかったが、第3C層の上面で小穴SP301・302、土壙SK303を確認した。いずれも埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルトであり、第3B層内遺構とみられる。出土遺物がなく時期は不詳であるが、第3層およびこれらの遺構もが中世に遡る可能性がある。

SP301は調査区の西部にあり、一部が現代の攪乱によって壊されている。直径0.2m、深さ0.1mでごく浅いものである。遺物は出土していない。SP302は調査区の中央やや東寄りにあり、直径0.2m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。

SK303はSP302の西側にあり、東西が長径で0.8m、深さは0.1mである。調査区南壁沿いの側溝で南半の形状は不明であるが、短径0.3m程度とみられる。

第2層は作土であるが、耕作に伴う遺構は確認できなかった。遺物では、第2層の機械掘削中に瓦質土器などの近世遺物を少量得た。

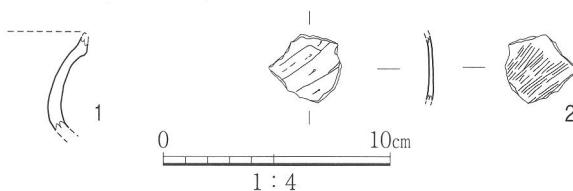


図11 第8層出土遺物実測図

2) 東区

i) 古墳時代の地層と遺物

第8層は泥炭質シルト層で、東区の西側では粗粒砂偽礫および第9層に由来する灰白色中粒砂偽礫が含まれ、洪水などで攪拌された

堆積物である可能性も考えられたが、確認した範囲が狭小のため、断定はできない。本層に伴う遺構は確認できなかったが、古墳時代前期の土器片1・2が出土した。1は壺の口縁から頸部にかけての細片で、口縁部は上方にややつまみ上げている。頸部にはヨコナデによって消されかけたタテハケの痕跡が残っている。2は一般的な布留式壺の胴部片とみられ、表面にハケメ、内面にケズリが認められる。表面にはおこげも付着している。

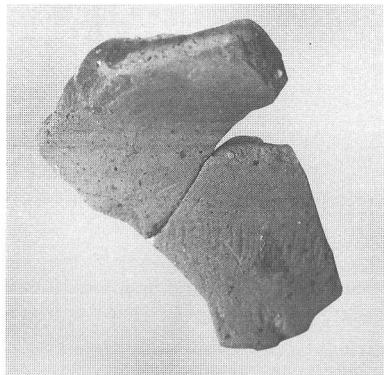


写真1 第8層出土壺1

これらの土器片の器面は摩耗しておらず、遠隔地から長時間かけて運ばれてきたものとは考え難いため、近隣に当該期の集落が存在することを示している。

ii) 古代の地層と遺物

第4～7層から出土した遺物はなく、観察結果も西区と同一である。

iii) 中近世の遺構と遺物

東区の地層も西区と同一であるが、第3層に関連する遺構は検出されなかった。

第3節 平野馬場遺跡との地層の対比

今林遺跡では遺物の出土量が少なく、特に中世～古代に当る地層の年代比定が未解明である。そのため、本遺跡の南東1kmに位置する平野馬場遺跡の層序との対応を試み、今後の調査への備えとする。

平野馬場遺跡の現在の標高はおよそTP+4.1~4.4mで、東側がわずかに低い。今林遺跡の標高はおよそTP+4.0mで大きな差はない。

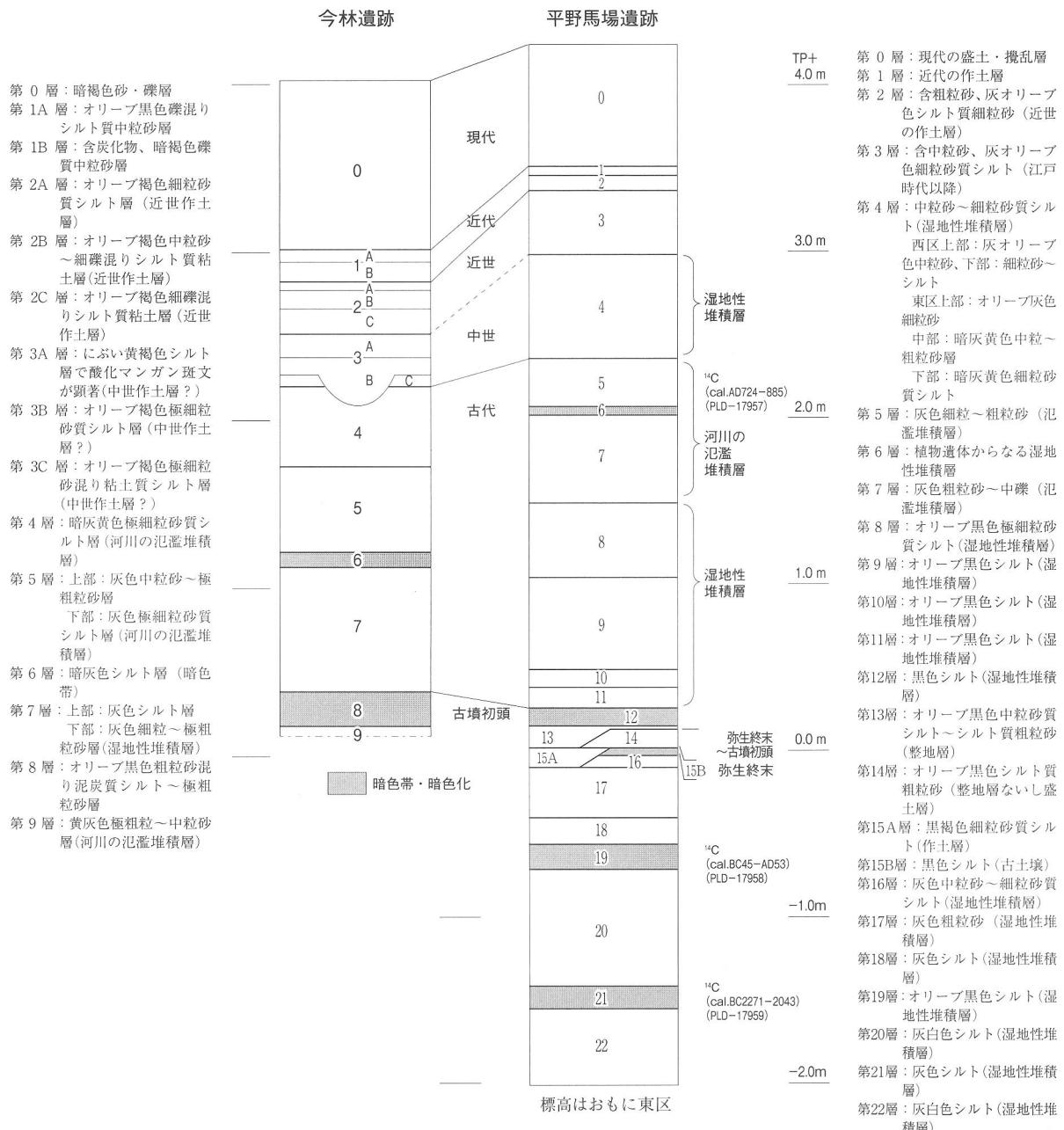


図12 地層の対比

平野馬場遺跡では現代から縄文時代まで22層準が確認された。このうち、河内湖から離水して陸地化が進行し始めたのが第19層で、弥生時代中期を示す14C年代測定値(cal. BC45-AD53(2 σ) PLD-17958)が得られている。その上位にあって、古式土師器を含む地層は第15層～第12層であるため、今林遺跡と地層の対応関係が図れるのは第0～15層までのいずれかの地層ということになる。

中世の地層は、平野馬場遺跡では出土遺物から第4層となる。湿地性の堆積層であり、その上位にある作土層は中世の遺物も含んでいるものの近世に降ると推定されている。今林遺跡では確実に近世である第2層の下位にある作土層(第3層)が中世に遡る可能性を持っている。しかし、平野馬場遺跡の中世の状況は不確かであるが、耕作地が拡がっていなかったとすると、今林遺跡の第3層はやはり近世に降る可能性も否定できない。

古代の地層は、平野馬場遺跡でも顕著な遺構が確認できず、次に時代の明らかな第12層が古墳時代初頭であり、その間の地層はおよそ上部の河川の氾濫堆積層(第5～7層)および下部の湿地性堆積層(第8～11層)を認めるのみである。上部の堆積層に一時期湿地性の堆積層(第6層)が形成され、そこから出土した材の14C年代測定値(cal. AD724-885(2 σ) PLD-17957)により古代の地層と比定されている。今林遺跡の場合も、中近世の作土層の下位は上部に砂を主体とする河川の氾濫堆積層(第4・5層)があり、下部は湿地性堆積層(第6・7層)で、平野馬場遺跡の堆積状況と共通する点が多い。よって、今林遺跡の場合も、おおよそ第4・5層付近に古代が相当すると思定しておく。

平野馬場遺跡では第12層から古式土師器が出土して古墳時代初頭の年代が比定されており、そこから第15層まで、弥生時代終末期の遺構面が重なっている。今林遺跡の場合は、わずかな出土遺物であるが、第8層からの出土遺物から本層を古墳時代初頭に当てはめてよかろう。泥炭質な地層からも、周辺地域に安定した陸地を形成した時期があったことが窺える。ただし、第8層の一部に第9層の偽礫をはじめ洪水などの激しい流れで堆積した状況が認められたことから、近隣にあった当該期の地層が再堆積した可能性も否定できない。

以上のように、今林遺跡の層序は平野馬場遺跡との共通点から対応関係を想定することが可能であるが、詳細な対応やそれらの検証については、今後の調査によって行う必要がある。

第Ⅲ章 まとめ

今回の調査で、古墳時代～中近世の各時代における今林遺跡の様相の一端を把握することができた。古墳時代では、前期に遡る古式土師器と当該期の陸地化を示すとみられる泥炭質の地層を確認した。この地層の延長には土壤形成の進んだ安定した陸地が拡がっているとみられ、南東1kmに位置する平野馬場遺跡と同様に、平野川流域の自然堤防上に立地する新たな集落の可能性を示すものとして重要であろう。

古墳時代の後半から古代ないし中世にかかる時期には、平野川および旧西除川の影響で、当該地は湿地ないし河川の氾濫が及ぶ地域となっており、若干の動物の踏込み痕を認め、また一時的に土壤形成が進む時期があるものの、その他の動植物による痕跡は低調である。

中近世にはいって、ようやく人間活動が活発となり、一帯は作土層が拡がる耕作地に活用された。

以上のような古環境の変遷と遺跡の消長はやはり平野馬場遺跡と共通点が多いといえよう。

引 用・参 考 文 献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996、「上町商事(株)による建築に伴う発掘調査(KW94-16)」:『平成6年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.83-96

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「天理教大阪分教会建設工事にかかる林寺遺跡発掘調査(HY00-1)報告書」:『平成12年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73-77

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「桑津遺跡発掘調査(KW05-2)報告書」:『平成17年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.99-108

大阪市文化財協会1998、『大阪市東住吉区桑津遺跡発掘調査報告』

大阪市文化財協会2009、『平野区平野馬場一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(HV09-1)報告書』

大阪市文化財協会2011、『平野馬場遺跡発掘調査報告書－百済駅改修工事に伴う発掘調査報告書－』

建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』

小山正忠・竹原秀雄1970、『新版標準土色帖』日本色研事業

文化庁文化財部記念物課編2010、『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、同成社、pp.93-116

**The Excavation Report
of the Imabayashi Site
in
Osaka, Japan**

A Report of an excavation prior to the
Development of the Tobu Public Market in 2008

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

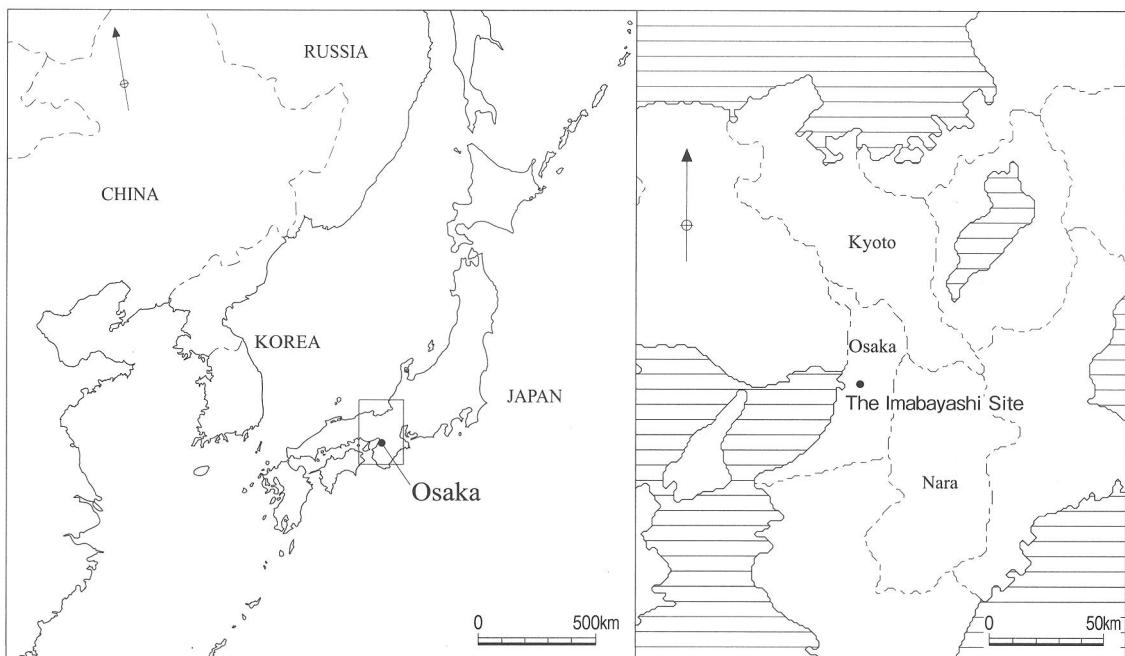
CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Location of the site and Progress of Reserch	1
1) Location of the site and the history of the area	1
2) Progress of Reserch	2
3) Report Making	3
Chapter II Investigation Results	5
1) Stratigraphy	5
2) Features and finds	9
3) Comparison with the Hirano-baba site stratigraphy	11
Chapter III Conclusion	13
References	14

English Contents



報告書抄録

ふりがな	いまばやしいせきはくつちょうさほうこく							
書名	今林遺跡発掘調査報告							
編著者名	清水和明・小田木富慈美							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまばやしいせき 今林遺跡	おおさかしひがしうみよし 大阪市東住吉 くいまばやし ちょうめ 区今林1丁目	27121	-	34° 38' 24"	135° 32' 21"	20081222～ 20090116	160m ²	遺跡内容の 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
今林遺跡	集落跡	中近世・古墳	水田	土器				

古墳時代～中近世の各時代における今林遺跡の様相の一端を把握することができた。古墳時代では、前期に遡る古式土師器と当該期の泥炭質の地層を確認し、本層の周囲に安定した陸地が拡がっていた可能性がある。南東1kmに位置する平野馬場遺跡と同様に、平野川流域の自然堤防上に立地する新たな集落の可能性を示すものとして重要であろう。

古墳時代の後半から古代ないし中世にかかる時期には、平野川および旧西除川の影響で、当該地は湿地ないし河川氾濫の及ぶ地となっており、若干の動物の踏込み痕を認め、また一時的に土壤形成が進む時期があるものの、その他の動植物による痕跡は低調であった。

図 版

図版一 西区調査終了時・遺構検出状況

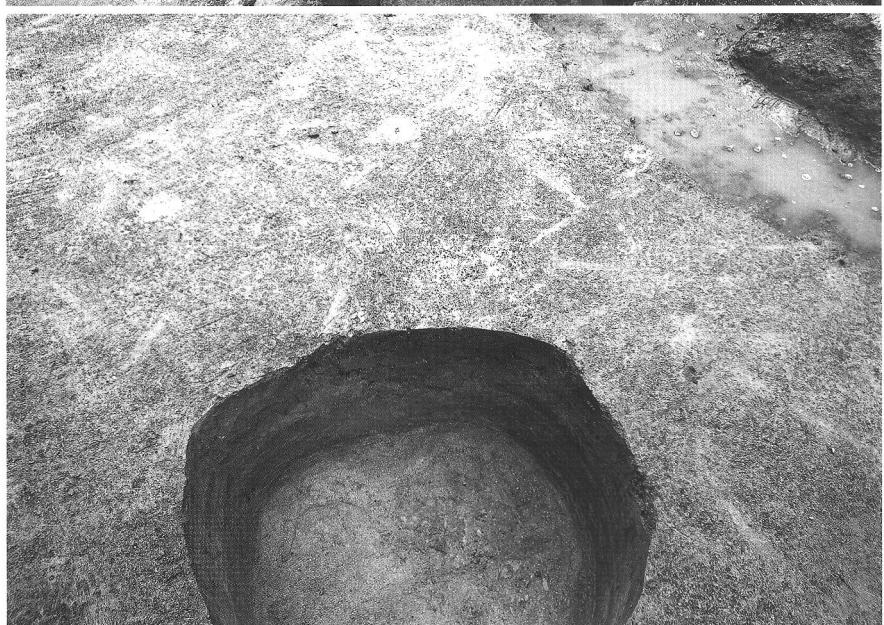
調査終了時(北西から)



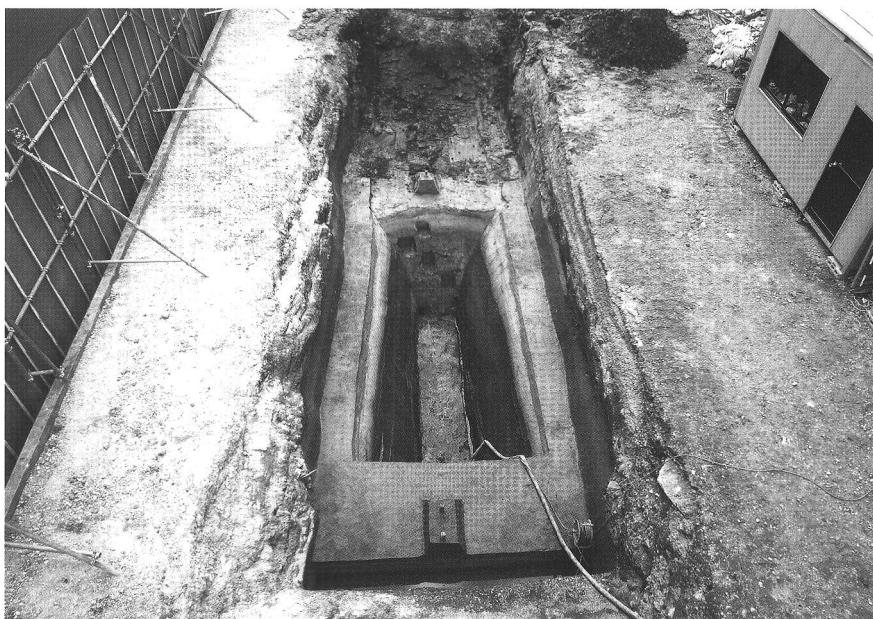
第4層上面(西から)



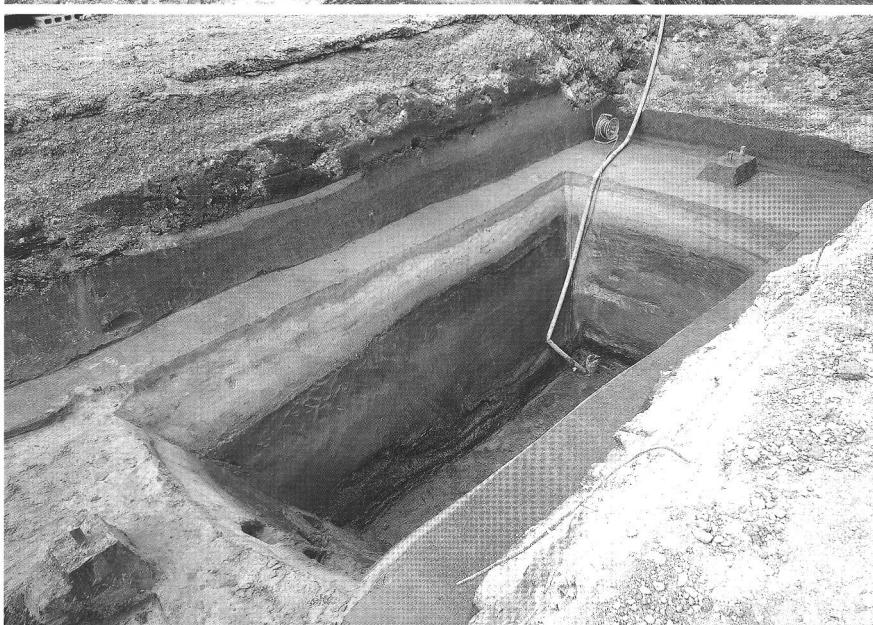
SP301検出状況
(北西から)



図版二 東区調査終了時・地層断面



調査終了時(東から)



調査区北・東壁地層
断面(南西から)



調査区深掘り部南壁
地層断面(北から)

大阪市東住吉区 今林遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-078-5

2012年3月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8



**The Excavation Report
of the Imabayashi Site
in
Osaka, Japan**

A Report of an excavation prior to the
Development of the Tobu Public Market in 2008

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association